

震災後のキャリア教育

3月11日に日本を襲った大地震と巨大津波。教育現場にも物理的・心理的に大きな被害と影響を及ぼしました。震災前と震災後でキャリア教育のとらえ方やキャリア教育で実現できることは変わらないのか、変わっていくのか。

キャリア教育・防災教育の第一人者と被災地の先生に投げかけました。

取材・文(村上先生)・撮影／堀水潤一

キャリア教育が試されている

—— 日本キャリア教育学会会長 菊池武烈 ——

■ あるのは「漂流」だけか

今、キャリア教育が試されている。キャリア教育は何をしてきたのか。

中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」は、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とし、次のように言っている。

人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。…人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。人はこのような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。このキャリアは、ある年齢に達すると自然に獲得されるものではなく、子ども・若者の発達の段階や発達課題の達成と深くかわりながら段階を追って発達していくものである。またその発達を促すには、外部からの組織的・体系的な働きかけが不可欠であり、学校教育では、社会人・職業人として自立していくために必要な基盤となる能力や態度を育成することを通じて、一人一人の発達を促していくことが必要である。

このようにして、社会的自立に向けて子どもを育てる、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力を育てる「キャリア教育」が提唱され、推進されてきた。その課題は「将来を見据えて今を生きる」ことである。過去、現在、未来の流れの中で、自分のいる位置をとらえ、向かうべきところを定め、そこへと方向づけ、力強く向かうことである。そのために子どもたちに位置測定装置と推進エンジンを持たせるのがキャリア教育と言ってもよい。

そのキャリア教育の基盤が大震災で失われた。大震災は一瞬にして、人びとの生活基盤を喪失させた。現在の生活だけでなく、過去も、そして、将来展望も喪失せしめた。キャリア教育の依って立つ基盤は崩壊した。そこにあるのは「漂流」である。自分のいる位置を確定し、

向かうべきところを定め、そこへと方向づけ、力強く向かうことなどできそうもない。位置測定装置も推進エンジンも役に立ちそうにない。このような状況は被災地域だけではない。いわば社会全体がこのようになっている。聞こえるのは、がんばれ！ がんばろう！ のかけ声ばかり。一体何をがんばるのか。誰ががんばるのか。

■ 毎日の生活のなかに

こういう状況でキャリア教育に何ができるか、何が期待されるのか。私は、「キャリア教育が試されている!」と思った。

そうした中で、避難所での子どもたちの行動を知った。避難所新聞づくり、清掃、介護、等々。高校生が、中学生が、小学生たちが、置かれた状況のなかで自分たちのできることをしていた。私は、そこに「キャリア教育」を感じた。それは冒頭の「人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。人はこのような自分の役割を果たして活動すること、つまり『働くこと』を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが『自分らしい生き方』となっていくものである。このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ねが、『キャリア』の意味するところである。」を彷彿とさせるものであった。大震災で生活基盤を失い、現在の生活だけでなく、過去も、そして、将来展望も失い、キャリア教育の依って立つ基盤も崩壊したように思えたが、そうではなかった。そこには毎日の生活があり、明日への展望がある。だからこそ、キャリア教育なのだ。

今こそキャリア教育の意義を考えるべきではないか。キャリアを軸とした発達や教育の課題に研究・実践の領域を持つ、キャリア教育に関する唯一の研究団体である日本キャリア教育学会こそそれを問わなければならない。

きくち たけかつ

東北大学名誉教授。2008年より日本キャリア教育学会会長。専門はキャリア発達。「社会心理学特論」「生徒指導・教育相談・進路指導」など著書・共著多数。日本キャリア教育学会は1978年に日本進路指導学会として発足。2005年に現名称に変更。学会には研究者のみでなく、小・中・高校、大・短・専門学校、企業など、広く多方面の分野から参加。

誰かを幸せにできるかもしれないという 「最上の希望」

—— シンクタンク未来教育ビジョン代表 鈴木敏恵 ——

■ 未来をつくるコンピテンシー

キャリア教育って何だと思う? 「…どう生きるか、を考える時間でしようか」。誠実な教師が少し考え静かに答えてくれました。どう生きるか考えるということは、未来を信じているということです。

3.11は、信じていた未来を一瞬で奪い、目に見える大切なものを失わせました。でも目に見えない大切なものまでは奪えません、未来を創れる若者たちの出番です。彼らは未来へ向かう強い生命力をもっています、そして人の役に立つことが本能的に好きです。そのためにはコンピテンシーを身につける必要があります。たとえば、現実と対座しそこから情報を獲得し自らの知識や行動に変えられる力、異なる考えの人とコミュニケーションを果たせ、新しいアイデアや課題解決策を生み出せる力、獲得した知をわかりやすく表現できる力、未知へ立ち向かう挑戦心や未来をイメージできる力も必要です。

ここにプロジェクト学習の手法が応えます。なかでも「防災」を題材にしたプロジェクト学習は、意志ある学びを叶え、コンピテンシー修得によるキャリア育成を実現します。そのプロジェクト学習の考え方はどう生まれたのか、そのもととなる建築のプロジェクトの話を少しさせてください。

■ プロジェクトとは夢を実現すること

自分がイメージしたものを生み出すことが好きな私が15歳の時に選んだのは、東京の建築科のある高校でした。

一級建築士の資格を得て、昼のあるパソコン教室やインテリジェントスクールのモデルや未来型の情報校舎、宇宙への昇華と名付けた総長26mのガラスの階段オブジェも作りました…創造や新しい発想にはモデルも正解ありません、求めて、求めて、寝ても覚めても考えて、ふっとひらめいたアイデアを1本1本の線に宿し、平面図や詳細図とします、図面は複写され大勢の手に渡ります。

建設プロジェクトが本格的にスタートします。地中杭の配筋、型枠職人、コンクリート打設、あらゆる会社や職人さんたちが図面を見ながら各自の仕事をしていきます、役割は違いますが全員が同じゴールへ向かうチームです。現場の人が立ち寄るプレハブの中には必ずパース(完成予想図)が掲げられています。自分のしているタイル貼りはこの建物の一部なんだ、パースをみて職人さんは誇りとミッションを感じます。まっさらだった土地に建築物が完成します、みんなの夢の結実です。竣工式ではいつも涙が溢れます。

プロジェクトは身も心も尽くす価値のあるものです。最後に膨大な図面や情報を整理し普遍的なものだけポートフォリオとします。俯瞰という言葉も、ディテールに神は宿るということも建築の世界で知りました。根拠のない情報であいまいなプレゼンテーションをしたり、テキトーという言葉を使えばその瞬間に職人さんは私を信じることをやめるでしょう。私が彼らに敬意を払わずぞんざいなコミュニケーションしかできなければ仕事の質はあきらかに落ちます。プロジェクトは人間を成長

させます。

■ ミッションこそ生きる力

いま意志ある学びを理念とする、未来教育プロジェクト学習は知識創造社会に求められるコンピテンシー／PISA型学力やキャリア教育に有効な手法として、小学校から大学FDなど教育界、医療界における人材育成に至るまで広がっています。それはゴールへ向かうプロセスで、課題発見・解決力、クリティカルシンキング、論理的思考、コミュニケーション力などを身につけられるよう設計されています。チームの知を結集して向かいます。

最大の特徴は、学習のゴールを社会のニーズにするとところにあります。ゴールは、他者に役立つ「知の成果物」を生み出すことです。それは『朝から元気でいられる健康アイデア集』や『この町のみんなが助かるための防災提案集』などミッション溢れるものです。社会へ提案するものですから、根拠ある情報をロジカル思考で簡潔にわかりやすく表現します。現実と対座して進行するものですから時に問題が起きます、建築の現場と同じです。困難があるから学習者にモチベーションや挑戦心が高まります。

いろいろな題材で遂行できますが、なかでも「防災」を題材にしたプロジェクト学習が広がることを願っています。地震であれば水平避難、集中豪雨や津波のときは、とにかく上へ! 垂直避難なんだ! と自分で目の前の状況を見て決断、行動できる柔軟で優れたコンピテンシーが身につきます。自分をもち自分をまず助けられなければ他者を助けることもできないと気づかせます。

■ 若者たちの希望とは

生きるためには希望が必要です。若者たちの希望は何でしょう。大震災の光景をTVやネットで見た人は、誰もがすぐにでも現地へ行って力になりたいと希望しました。心がへこんだ人には、ときに慰めよりも誰かの力になることが生きる希望となります。私たち人間は他者のために何かするとき生きる力が湧き自らも成長するようです。

「自分は、もしかしたら誰かの役に立てるかもしれない」、これこそ若者にとって最上の生きる希望のような気がします。キャリア教育…学生へ「どこの学校(会社)へ行きたいのか」とたずねるより「あなたは、将来どんな人を幸せにしたい?」「どんな人の役に立てたらいいと思う?」と問いかけてもいいかもしれません。きっと彼らの心をまっすぐ未来へ向かわせるでしょう。

すずき としえ

一級建築士。内閣府中央防災会議専門委員。千葉大学教育学部特命教授。コンピテンシー育成、防災教育、情報教育、キャリア教育、プロジェクト手法による目標管理などを、教育界・医療界・自治体などで提案、指導。「看護師の実践力と課題解決力を実現するポートフォリオとプロジェクト学習」など著書多数。

生き残ってわかった結論 「考えるよりも感じること」

—— 岩手・私立花巻東高校 教頭 村上育朗 ——

■ 高校生は自立していた

私は、この3月まで県立大船渡高校に勤めていました。幸い震災当日、家族は花巻市におり、私も盛岡市で会議に出席していたため難を免れましたが、陸前高田市の自宅は津波で全壊しました。留守中の管理をよく頼んでいた叔母の遺体は5月16日にあがりました。叔父といここはまだ見つかっていません。

不思議と涙はでできません。涙とは、気持ちに余裕がないとでてこない。人知を超えたものに遭遇したとき、喜怒哀楽の感情はとんでしまうのでしょうか。涙がでてくるのは、この先だと思っています。

震災後は3週間、陸前高田市内の避難所にとどまりました。今は、妻の実家がある花巻市に住み、花巻東高校の教頭をしていますが、週末は被災地へ赴き、お年寄りが孤立しないよう支援を続けています。

避難所で一番感じたこと、それは、高校生は役に立つということです。よく働いた。それもどちらかというと、できの悪いと思われている生徒ほど働いた。本当に感動しました。

3月11日の夜、大船渡高校の第2体育館には、大勢の生徒や地域の人たちが避難していました。雪こそ降りませんでしたが、寒くて、寒くて仕方ありません。そんなとき、生徒の誰かが「そうだ、同窓会館に毛布があるはずだ」と言い出しました。そして、余震の恐怖のなか、建物から毛布や布団をあるだけ引きずりだし、被災者に配ったのです。

残念ながら、大人は役に立ちませんでした。それどころか高校生が集めた毛布を奪い合うようにしていたのです。見苦しい限りでした。翌日、やはり高校生が少ない物資を配っているときも「もう少しよこして」と言う人が現れました。そのとき「大人がそんなことを言ったら駄目だ」という声があがりました。その言葉でみんな我に返ったのです。

高校生たちは寒空の中、誰も指示をしていないのに車で逃げてくる人たちの交通整理もしていました。大人はうろたえているだけ。ここで書きたくないこともありましたが、いかに高校生の存在がありがたかったか。彼らは自立していました。普段、自立していないと見えるのであれば、そうさせていたのは、我々教員や大人のほうだったのです。

■ 若い店長の行動

こんなエピソードもありました。その夜の体育館は、余震がくるたび、天井に吊ってある電灯が大きく揺れました。とても怖いのですが、暗くてよく見えません。そんなときでした。近所にオープンしたばかりの家電量販店の店員さんが、店にあった石油ストーブと、あるだけの懐中電灯、カゴいっぱい電池を届けにきてくれたのです。安堵感が広がり、自然に拍手が起こりました。

後日、その時の経緯をうかがいに店を訪ねると、驚くことに、現れた店長さんは26歳の若者でした。私は、マニュアルに基づいての行動であったのかと尋ねました。すると「あんな事態は想像していないしマニュアルなどありません。上司にも相談していません」という返事。

「店の物を勝手に持ち出したことを、あとで本部からとがめられるとは考えなかったのですか？」と聞くと、彼は「考えませんでした。ただ寒さだけを感じていました。私が寒さを感じるということは避難所の人はもっと寒いだろうと思って行動しました」と答えたのです。

そう。考えたんじゃない。感じたのです。

26歳の若者が、感じたままに行動したからこそ、多くの人を助けることができた。もし、頭で考えていたら、「上司に責任を問われるかも」「弁償をせまられるかも」と躊躇していたかもしれません。

■ マニュアルは役に立たない

陸前高田市内のある小学校の体育館が津波の直後に火災になりました。そんな二重の緊急事態に対応するようなマニュアルはもちろんありません。校長は一刻も早く生徒を逃がし命を救うことを最優先に考えました。1年生は教えられなくても裏山に真っ先に逃げ、上級生は下級生を見守りながら冷静に行動しました。校長はそれぞれが生きる力を身につけていたことを目の当たりにし感動したそうです。かわいそうに、これと反対のことも起こりました。避難訓練のときと同様に、マニュアル通りに整然と行動し、津波にのみ込まれてしまった小学校があります。助かったのは、「これは、ただ事ではない」と感じ、自分の判断で崖を駆けのぼった教員と生徒のみでした。

教えられたとおりに指定の避難場所に逃げ、津波にさらわれた人も大勢います。やはり助かったのは、ここは危険だと感じ、さらに高いところに逃げた人。いわば、人の言うことを聞かなかった人たちです。

考えることが駄目だと言っているわけではありません。けれど、生死を争うような場面では、頭で考えるのではなく、感じて行動することがいかに大切な。これからさまざまなところで、震災や津波に対するマニュアルが作られるでしょう。完璧かもしれないが、さっぱり血が通わないマニュアルを。私は、そんなものは何の役に立たないと思っています。

日常のことはいい。けれど、命にかかわることをマニュアルで教えることはできないというのが、生き残ってわかった結論です。あの店長のように、自分で感じ、行動できる。そういう人間を育てることが教育だと今は思っています。教えるのではなく、気づかせる教育です。

涙はでないと述べましたが、唯一涙を流したのは、がれきのなか、母校の高田高校を見たときです。津波が通り抜けていった3階の窓にカーテンが風でゆれていました。卒業して四十数年、こんな光景を見ることは夢にも思いません。それまで、いっぱいいっぱいだったのに、はじめて人間の感情みたいなものがこみあげてきました。

考える時間があるのなら、みなさん、ぜひ被災地に行き、何かを感じてほしいと思います。

むらかみ いくろう

岩手県立大船渡高校の教頭を経て、2011年4月より私立花巻東高校教頭。大船渡高校在職時に「県北沿岸地域5校 学力連携向上プロジェクト」を立ち上げるなど、県内外に幅広いネットワークを構築。年間約100回の講演をこなす。

(5月29日 電子情報通信学会「コミュニケーション科学の魅力と学習意欲の向上」での講演より)

問われる指導

生き方モデルが見えなくなった今

—— 岩手・県立盛岡農業高校 教諭／ガイダンスカウンセラー 荻間澤勇人 ——

■ 決断した高校生

東日本地域が大震災に見舞われて壊滅的な状況であることを知り、これからどのようにキャリア教育を進めて、進路指導をしていったらよいのだろうと思った。それは、家族の命や財産、職場やコミュニティが失われた状況や、多くの企業が再開の目処が立たないために就職することが難しい状況、保護者が仕事を失い収入がなく、さらに職に復帰する見通しもつかない状況において、私の中の生き方のイメージやモデルが一切役に立たないことを悟ったからであった。

また、キャリアカウンセリングを学び、生徒が人生を自己選択していくようにキャリア教育を推進していたつもりであったが、就職希望者をとにかく職に就けることや、多くの生徒を大学に合格させることを第一と考える価値観で教育活動してきたことに気づいたからであった。生徒に語るものが見つからなかったのである。

被災を受けた教員仲間に生徒の進路希望について聞いた。「被災状況にかかわらず進路希望を変更する生徒はほとんどいない」が、「少数ながら、大きな被害を受けた生徒が進路選択を迷っている」ということであった。

実際、大震災の影響を伝えるニュース番組で、男子高校生が「私は大学進学を目指していたけれど、この大震災で進路を変えようと思っている。地元に残って地域の人たちと町の復興のために瓦礫を片付けたいと思います」と話していた。彼が進路選択を変更せねばならないほどの被災であったことを残念に思うと同時に、人生の節目となる高校3年次に、町の復興を目指して地域で生きることを選んだことに敬意の念をもった。そして、彼が仕方なく選択したのではないこと、つまり、熟考して“以前のような豊かな自然の中で人々が穏やかに生活する町にする”という「夢」を見いだして選択したことを願った。

また、地元で就職希望であった生徒が、「後ろめたさを感じるが、一度首都圏で仕事に就いて、金銭的な面で保護者を助けたい」と話していた。

これらの高校生のように、生き方のイメージやモデルが見えない状況において、本気で生き方を模索している生徒がいる。

■ 進路選択の停止

しかし、就職希望であった生徒や、進路選択が進んでいなかった生徒の中には、進路選択を停止してしまったように見える生徒もいる。地域に職はなく、瓦礫を撤去する人の中には、職場をやむを得ず解雇されて、ボランティアで働いている人がいる。地元での就職を希望して、その通りに進むのには大きな困難が伴うのである。一度、地域を出て就職するということも考えられる。実際、岩手県の沿岸部では、これまでも首都圏に就職する生徒が多かった。しかし、自分が生まれ育った地域が大きな被害を受けて、復旧の速度が遅い状況を見るとき、また、大きな余震が発生するという予測があるとき、家族を残して首都圏

に就職しようとする生徒がどれほどいるか。ある支援員によると、実際に「父や母を残して地元を離れるわけにはいかない」、「地元の復興に携わりたい」と話す高校生がいるという。どの生徒も地域がどのように変わるのか、自分がどのような人生を歩むのかという予想がつかず不安が大きくなっている。だから家族と一緒に過ごし地域を復興したいと思うのである。

今までとは違う新しい生き方のイメージやモデルを探しているが、先が全く見えないから進路選択ができず、進路選択を停止しているように見えるのであろう。

■ 教師のとる二つの道

今、教師はどんな援助・指導をすればよいのか。私は、2つあるように思う。

1つは、多数の新しい生き方をイメージして、モデルとして提示することである。教師も経験したことのない厳しい状況に遭遇している。それゆえ、新しい生き方をイメージするのは難しい。教師が無意識にもっていたイメージや価値観を脇において、新しい生き方のイメージを考えることによって前進することが可能となる。

2つは、子どもたちが決める人生設計に理解を示して寄り添うことである。伴走者がいることで不安でも前進することが可能になり、誰かとキャリアを語ることで希望や方向が見えてくる。また、そうすることで、「生きる」とか「生かす」という教育が目指す最も大切な力を育むことができる。

キャリア教育は、生徒が進路を主体的に選択・決定できるようにすることが目標である。今こそ、学校にはキャリア教育の実践が、教師にはキャリアカウンセリングが求められる。キャリアには“モーレツに突き進む（前進）”という意味もあるという。全く先が見えないときだからこそ、子どもたちに前進することの大切さを説き、教師も子どもたちと共に前進して、新しい生き方のモデルを作っていきたいと考えている。

■ 指導者・援助者の連携を

今、キャリア教育や進路指導の関係者に求められるのは、方向性が統一された連携である。子どもたちのキャリア教育や進路指導に指導・援助しようとする機関がたくさんあり、被災地では、いずれの機関もそれぞれに懸命に活動している。しかし、震災から3カ月、活動に統一感を感じなかった。明確な方針のもとに連携されることによって、より効果的な指導・援助が可能となると考えられる。子どもたちの働く権利を保障するために、連携して前進したい。

かりまざわ はやと

ガイダンスカウンセラー（上級教育カウンセラー）。キャリアカウンセラー。日本カウンセリング学会認定スーパーバイザー。学校心理士。盛岡商業高校、豊石高校など所属校で教育力・キャリア教育実践・研究を続けてきた。『教師のコミュニケーション事典』に編集参加。